”ではの神“を止め、日本型都市を

ことしの夏も、いろんな都市を訪ねた。小泉首相が涙を流した日系人のふるさと・サンパウロ。近年は中国や韓国の影響力が強く日本街は東洋街と呼び名も変っている。決して美しいとはいえないがパワフルである。

これに対して、海と山と湖、それにビーチ、大自然の特徴を十分に生かしつつ見事にデザインされたリゾート都市・リオデジャネイロ。ユニークな建築を許容する懐の深さもある。

アマゾン川河口の港町・ベレン。ポルトガル時代の要塞や岸壁、植民都市の歴史を生かしつつニューファッションにリニューアル。鬱蒼とした熱帯雨林ふう植物園やマンゴーの大木の並木の旧市街地と極端なコントラスト。ともかく青空がちがう。

ペルーのリマ。こちらの空はどんより暗い。南米はみんな冬だが、ほこりまみれの街路樹が一応花や緑をつけている。大使館事件でも知られたが、どの家も高い鉄柵でガードが固い。首都の風格もあるし、親切だが、日本的感覚では気が重い。

変わってカナダはバンクーバー。水も緑も町並みも、近景も遠景も、高質の田園都市でいうことなし。清潔感と洗練されたセンス、それにカナダインディアンのトーテムポールやデザインモチーフをコンセプトとするウッディな空港ビルも最高だ。広大なキャンパス用地を不動産開発、その利益を大学運営に回すブリティッシュ・コロンビア大学の経営法も面白い。

地球は狭くなった。たくさんの人々が世界の都市を比較できるようになった。

そんな世紀の、これからの日本の都市づくりはどうしたらいいのか。

それには先ず、”ではの神“からの脱却が求められるように思う。フランスでは、イギリスでは、フライブルクでは、バークリーでは。見ること、学ぶこと、知ることは大切だ。仕組みや仕掛けが参考になることも少なくない。

しかし、都市づくりの着想、発想、構想を、たとえニュータウンであっても外国の事例を模倣してはならない。国土の自然条件も、地域の社会条件も、住民の環境観や風景観もまったく異うのに、「〇〇では」をワンセットでコピーするなどもっての外である。世界中の都市はみんなちがうから訪ねたいと思うのである。アーバン・ルネッサンスというなら、その国ならではのプロトタイプ（原型）を復興するのが一番だ。

金山杉のまち　堀割を修景して景観創出　山形県金山町

明治期の都市再生事業　疏水が生んだ風景　哲学の道　京都市

塩田という伝統産業が育てた風格ある町並み　広島県竹原市

構図は「小盆地」、原風景は「農」に

都 市

都心部に快適な水辺環境を　せせらぎの創出　浜松市

江戸期の早川堀を復元　水都の面影が甦った　新潟市

市の中心を流れる新町川　河畔を景観整備　徳島市

といえどもベースは、地形地質、植生と水理。東アジアの”風水地理（背山臨水）“と緑濃き山々、防風林、屋敷林で幾重にも囲まれた日本の都市。その典型が”京都・小京都“。正にひとまとまりの安心世界・小宇宙盆地である。都市をつつむ山並み、住区や街区を安定させる緑の並木軸や河川軸が、都市の空間や景観に、或る種のまとまり感や安定感を付与する。城下町を貫く水系と、風にそよぐ柳の並木。天守閣の背後には〇〇富士か緩やかな山並み。これが典型的な日本型都市の構図であった。いつの間にか、水系も緑系も眺望も、すべてを捨てて高度利用することが都市開発“と錯覚した。デベロップメントは、ポテンシャルをひき出すこと。土木技術力に任せて土地の基盤をすべて改造することではない。建設技術力でニューヨークと同じ建築景観を創出することではない。

教育、いわば能力開発のように、その土地、その地域、その空間の素質を見抜き、それをどのように伸ばすのか。地域の風景資産をどれだけ発見し、どのように組合せて、どれだけ豊かで誇れるまちに仕上げるか。

先駆的に壁面緑化を試みたオーガニックビル　大阪市

福岡県国際会館 アクロスの屋上緑化　現在は更に樹が育っている　福岡市

都心ビルの屋上で稲を栽培　注目を集めた 東京・六本木ヒルズ　（写真提供：森ビル株式会社）

いわば”風景財テク“のようなものである。

ところで、日本の大地と日本人の心の根底にある集団表象に「農」があると私は考えている。「農」は、日本人に共通する原風景なのである。

世界との比較において独自性をもち、日本人の安全安心・ふるさと志向に応えられるアーバン・ルネッサンス。そのためのキーコンセプトは「農」にある。現代人は人工巨大都市に圧倒され、自然とヒューマンスケールをとり戻すことで癒されたいと願い、工業化で画一化した景観から脱し手作りの個性的景観に憬れ始めている。いわば二十世紀的都市化の逆で、二十一世紀的農村化への胎動が始ったのだ。

そのための思想と方法、それが「農」。私の言い方だと「百姓のデザイン」がこれからの都市づくりの最適モデルである。私は、その思想を『農の時代・スローなまちづくり』に、またその方法を『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法｜農に学ぶ都市環境づくり』（共に学芸出版社）にまとめた。

凡そ”エ“と”都市“の部分効率主義と経済効率主義は、分化分業化を推しすすめ、人間自身の本性であるトータリティをも破壊し、都市を無機的な住む機械におとしめてしまった。

こうした人間性を回復し、都市を生身の人間が生活する有機的な環境に再生するには、人間のなかの”百姓“性を再評価しなければならない。